

研究ノート

バリの風土と家系についての考察（ ）

松 原 正 道

序

前稿では、研究助成の報告を兼ね、バリ（島）を中心としたインドネシア（地方 旧・オランダ領東インド、蘭印）における第二次大戦（「大東亜＜太平洋＞戦争」）当時の日本統治下での「米」を始めとする「食糧」問題と、労働力として徴用された「ロームシャ（労務者）」についてふれ、日本統治下のバリ（島）を中心としたインドネシア（地方）について考察した。

また、オランダ軍が最初に上陸したシンガラジャ Singaradja, そこにおいて、バリ（島）の人々がオランダ軍と激しく戦ったジャガラガ地区（村）Desa Jagaraga. そこにあるジャガラガ寺 Pura Jagaraga には、堀に当時の様子を描いた浮き彫りがあり、それと共に、その経緯を記した書きものを手に入れたので、それを元にして、Hannaの著わした“Bali Chronicle”におけるそのくだりの訳出を以て、その抵抗の様子について考察を加えた。

本稿では、静岡県出身で、広島高等師範学校教育学科を卒業、和歌山県の教員となり、師範学校付属小学校校主事（校長）から日本軍統治下のインドネシア（地方）へ赴任、アンボン Ambon（アンボイナ Amboina）島、バリ（島）で文教政策に携わった鈴木政平氏、同氏が内地へ送ったその活動の様子を記した書簡、それをまとめた『日本占領下 バリ島からの報告 東南アジアでの教育政策』（草思社 1999）を元に、日本統治下のバリ（島）を始めとするインドネシア（地方）の状況を教育行政を中心に考察を試みてみる。

併せて、鈴木氏の活動の背景となった、第二次大戦、就中、日本が「大東亜戦争」と呼んでいた「太平洋戦争」の背景をなした「大東亜共栄圏」構想、その思想的裏付けをなした「八紘一宇」の考えに基づいて、日本がアジア諸地域へ進（侵）出することになった経緯について、越後高田藩16代藩主にあたる東京帝国大学法学部政治学科出身で、国策会社「台湾拓殖会社」に入社、台湾勤務の後27歳で砲兵隊に二等兵として応召、幹部候補生を経て28歳で中尉となった榊原政春氏の日記をまとめた『一中尉の東南アジア軍政日記』（草思社 1998）を中心に、当時の日本のアジアに対する考え方とその政策、特に、バリ（島）を含むインド

ネシア(地方)を中心として東南アジアの諸相についての考察を試みてみたいと思っている。

昭和16(1941)年12月8日の「大東亜(太平洋)戦争」勃発に伴い、翌、昭和17年3月、オランダ領東インド(蘭印)と呼ばれていたインドネシア(地方)も日本軍の占領するところとなり、以後、20(1945)年8月15日の終(敗)戦に至るまでの3年5ヶ月の間、日本軍による占領統治が続いたのである。

日本の5倍余りで、1,918,930平方キロメートルという広大な面積を持つインドネシア(地方)であるため、それをひとつのものとして扱うことが難しく、日本(軍)はその統治にあたり、それは、三分割されて行われることになったのである。

西北部のスマトラ Smatra 島の周辺は陸軍の第25軍が、インドネシア(地方)の主要部にあたるジャワ Jawa 島等は、同第16軍が、バリ(島)を含む小スンダ Sunda 列島、セレベス Selebes (現 スラウェシ Sulawesi)、ボルネオ Borneo (カリマンタン Kalimantan)、モルッカ Moluccas (マルク Maluku) 諸島、西部ニューギニア New Guinea (イリアンジャヤ Irian Jaya) 等の島嶼部は海軍が統治することになったのである。従って、バリ(島)は海軍の管轄下に入ることになるのだった。

『日本占領下 バリ島からの報告 東南アジアでの教育政策』にまとめられることになった数々の手紙を日本内地に書き送った鈴木政平氏はこうした海軍統治下のインドネシア(地方 蘭印)に送られ、文教政策に関わった者達の一人といえるのである。

海軍の統治下に入った島嶼部は、西南方面艦隊が担当したのだったが、その中心となったのがセレベス(スラウェシ)島のマカッサル Makasar (現 ウジュン・パンダン Ujun Pandang) で、セレベス、ボルネオ、セラム Seram の三つの地域に分けられ、鈴木氏は、昭和17(1942)年7月、このセラム地域に赴任したのだった。当初、このセラム地域の民政部の中心がアンボン Ambon (アンボイナ Amboina) におかれていたので、先ず、ここで海軍の司政官として文教政策に携わることになったのである。従って、同書に掲載されている彼の写真には、他の教員と共に海軍式の制服、制帽と共に軍刀を携えている姿のものもあるのである。

彼は、その時、42歳で、老齡の母、妻、中学生の息子を残しての単身赴任だった。

「海軍要員四百余人の一人として東京湾から出航し、インドネシアの海軍占領地へ向かったのである。このように、軍による占領統治とはいうものの、現実の行政に携わったのは、日本からそのために特別に送られた文官たちであった。それも、最高の人間をよりすぐって派遣しているのであった」⁽¹⁾といわれるような人材が赴任していったのであって、鈴木氏もその「よりすぐり」の一人といえるのだが、軍の統治下とはいえ、当時、民間のそうした人々

が選ばれたのだということが知れる。

それは、「これまで興亜の民を等しく錬成しなければならないという持論を展開していた鈴木氏としては、承諾の返事をする以外になかった」⁽²⁾といわれる事情があつての渡航だつた。

そして、「日本軍政は(中略)旧統治機構をおおむね温存した。官吏もオランダ人ら上級官吏の抜けたあとにインドネシア人官吏を多数登用している。しかしその後事務能力向上などを理由に多数の日本人職員が軍政中枢部をはじめ、地方行政組織にも配置された」⁽³⁾といわれる現実に則した事情がそこにはあつたのである。

鈴木氏はアンボン(アンボイナ)での半年余りの勤務の後バリ(島)への転勤になるのだが、この間、当時の日本でも見ることが少なかった上下水道の普及と、それに伴った水洗便所の多さ、整備された道路等に感心させられると共に、オランダの統治の優れている面をも認めて記しているのだつた。

「(一)立派な上水道が通っていることを御承知願わねばならない。私は和歌山と同じ程度の安心さをもって、毎日平気でその水を飲んでいます。(二)どんな大雨が降つたって水溜まりが出来るなんてへまなことの無いほど、下水道がよく行き届いています。流石に治水では永年苦勞を重ねてきたオランダ人の経営よと、その点では一応敬意を表しないわけにはいきません。(三)中流以上の家庭はほとんど全部水洗式便所になっているし、(四)電車はないが、道らしい道はことごとく舗装されて(せつかく太平洋を越えて持ってきた長靴を、私はまだ一度も用いたことがない)、しかも内地のような殺風景なそれではない。両側1メートルずつが緑の芝生にしつらえて、私たちの眼をよろこばせ、憩わせてくれる。(五)そして、その両側には内地のどこにも見られぬほど、銀色に塗った瀟洒な鉄の電柱が立ちつづいている。(六)キリスト教会が八つ、イスラム教会が五つ、学校が二十(現在開校のもの七つ、残り十三校の中には中学[男女共学]・家政女学校・師範学校・工業学校が各々一つずつ、他はすべて国民学校)。学校の多いのにまず驚きましたね。人口比例をもって和歌山市にこの数を及ぼしたら、百三十~百四十校を必要とする勘定になります」⁽⁴⁾と、オランダ統治の優れている点を認めると共に教員として学校の数の多さに驚かされているのである。

また、道路については、ジャワ島の幹線道路ともいえるジャカルタJakarta(バタビアBatavia)からバンドンBandungへの道について、「時速6,70マイル。ジャバ特有のドライブウエー、実に良い道路だ。道路は到るところにジャバ人あり。実際立ちションベンも出来ない位。土地は中々豊沃だ。青々とした草木本当に生き生きと見える。実際豊かな天国の感がする」⁽⁵⁾と道路事情の良さについて榊原氏もその書で記している如く、アンボン島とジャワ島との違いはあつても同じオランダ統治下の道路事情について述べているのである。特に、道路事情を含めて、彼の見聞したジャワ島について榊原氏は「天国の感がする」ともいっ

ているのである。

鈴木氏は、イスラム教の世界であるインドネシア（地方）にあってキリスト教会がイスラム教のそれよりも多いとも記しているのだが、それは、大航海時代、香辛料を求めてポルトガル人を始めとしたヨーロッパ人による、商業活動と共に彼らの海外進出の両輪をなしたキリスト教（カトリック）の布教が、ザヴィエル Francisco Xavier（1506 - 52）等によって行われたのだが、それがこの地を中心に始まったことによる名残りといえる。

そして、それは、17世紀初頭、ポルトガル、スペインに代わって大航海時代の第2陣を担ったプロテスタントのイギリス、オランダの間に起こった熾烈な競争の中でも行われたのである。同島のイギリス商館で働いていた日本人がオランダ商館を窺っていたということが発端となりイギリス商館員全員とポルトガル人、中国人、日本人が殺された「アンボン（アンボイナ）虐殺事件」Amboina Massacre（1623）を機にしたイギリスのインドネシア（地方）からの撤退の後のオランダの支配の結果によるものでもある。

赴任にあたり、「興亜の民を等しく錬成しなければならない」と勇躍し出かけていった鈴木氏の中には、「南洋の土人^{どじん}といえ、内地では一概に野蛮な黒ん坊とのみ思っていますが、しかし実際にぶつかってみると決してそれほどではないのです」⁶⁾と記している如く、「南洋の土人」とか「黒ん坊」といった言葉を使うような認識もあったのである。

その点では、日本は、「世界大戦（第一次世界大戦 筆者注）の結果、アジアに商業的進出をはたし、インドネシア諸島にも足掛りを作っていた。そして29（昭和4 筆者注）年以降は内部にも入りこみ、大衆向きの安い商品が人気を博して、ヨーロッパの商品を駆逐したのである。33年（昭和8年 筆者注）の統計で、インドネシアの総輸入額のうち、日本からの輸入は32%を占めたのに、オランダからの輸入は9.5%に急落している」⁷⁾といわれるように、満州国問題で、この統計の年である昭和8（33）年に、日本は国際連盟を脱退して孤立化の道を歩むのだが、インドネシア（地方）への輸出は、その宗主国オランダをはるかに凌ぐものがあったのである。このように、当時、既に、商社員を始めとする日本人が沢山インドネシア（地方）を含む東南アジアに進出していたのである。

そうした日本人の中の一人に、後に詳述するバリ（島）において自転車商を始めとして色々な事業に携わり、現地の人々に尊敬の念を以てみられていた三浦襄氏（明治21 < 1888 > - 昭和20 < 1945 >）がいるのであるが、こうした中で、高等師範学校出身で師範学校の教員である鈴木氏にあってさえ、東南アジアについての認識はこの程度のもだったということから、当時の日本におけるこの地域についての理解の程度が知れるというものである。

もっとも、これは、他の地域の人々、特に、中国、朝鮮半島の人々に対する認識、そして、その呼び方にしても同じことであり、それは、現実とは関わりなく、日本国民は優秀であって、他の民族は劣っているのだということを強調することで、劣等感の裏返しともいえる優

越感にひたっていたという、当時の日本人の在り方にも通じるといえるのである。「大日本帝国」とも称していたのだった。そして、それは、今日においても、バリ(島)を訪れた者の中に、「『冒険ダン吉』の世界のようだ」といった者がいるということから、当時としては仕方ないともいえるのである。そして、それをいったのが東京大学出身者だったのだが、これは何を意味するのだろうか。

鈴木氏は在任中、「アンボン(アンボイナ)虐殺事件」(1623)で殺された日本人の鎮魂祭があったことについても記しているのである。

その後の戦局の転換によって鈴木氏の勤務にも変化がみられるのである。

「ミッドウェーの海戦」の敗北(昭17<42>年6月3~5日)に始まり、兵力を小出しにしたためといわれており、昭和17(1942)年8月7日に開始され、18年2月7日に撤退が完了したとされる「ガダルカナル島の戦い」Battle of Guadalcanalでの作戦の失敗を機に、戦局は日本軍の劣勢へと傾いていくことになり、それに伴い、インドネシア(地方)統治にも変化がみられ、昭和18(43)年2月、セラム地域の民政部がバリ(島)に移ったことで鈴木氏もバリ(島)へ転勤、昭和19年12月に彼が同島を離れるまでの1年半余の間、小スンダ民政部と改称され、バリ(島)以東のロンボック Lombok、スンバワ Sumbawa、フローレス Flores、チモール Timor 等の島々をその管轄下においた職場での仕事に従事するのである。

そこで、彼は、前稿の考察でみた「ジャガラガの戦闘」のあった、北部のブレレン Buleleng 県(王国)のシンガラジャ Singaradja、そこが現在の州都デンパサール Den Pasar と違い、当時の行政の中心だったため、そこで全域の学校教育を司る文教課長として勤務するのだった。「1840年代バリ北部に対する武力出兵を行ったオランダ政府は、北部から西部にまたがるブレレンとジュンブラナのふたつの王国に自らの宗主権を認めさせた。(中略)行政の中心はバリ島北部の旧ブレレン王国の中心地シンガラジャに置かれた」(山下晋司・山本真鳥『植民地主義と文化 人類学のパースペクティヴ』新曜社 1997 215頁)というように、オランダ侵攻の始めからバリ(島)の統治の中心地をなしていたのがシンガラジャだったのである。

そして、そこでの彼の文教政策の基本となったのが、昭和15(40)年の第二次近衛内閣(40-41)以来唱えられていた「大東亜共栄圏」の構想に基づいた「世界建設」の考え方であり、それは東條内閣(41-44)になり、「日本帝国を中心としたアジアの諸民族が共存共栄することのできる秩序を確立する」というものとして明確化されていったというものだった。

軍事的側面に重点がおかれ、初期の「征韓論」から始まり、「日清戦争」(明治27<1894>-28<95>)、「日露戦争」(明治37<1904-05>)、「日韓併合」(明治43<1910>)、「シベリア出兵」(大正6<1917>-11<22>)、「満州事変」(昭和6<1931>-8<33>)等をひきおこすことになった、明治以来続いていた「北進論」、これに結びついた日本、満州、中国

を一つの体制に構築しようとする考え方が日本の対外発展策の支配的なものとして存在してきていたのである。

これに対して、明治20年代からみられるようになり、大正期にも続いてきはしたが、その主張が経済的側面に重点がおかれていたため、「南進論」は「北進論」に比べ世間における関心度は低いものだった。

そうした中で、昭和11(1936)年8月、広田弘毅内閣において総理大臣および外務、陸・海軍、大蔵の五相会議で、日本の国策基準としての南方進出が決定されたことで、「南進論」が、以後、脚光を浴びるようになり、「日中戦争」(昭和12<1937> - 20<45>)の膠着状態に伴って、それは一層、活発化していき、我が国の主要な外交方針となるのである。

そこには、資源の少ない日本にとって、石油、アルミニウム、ゴム等といった物資の供給源となるこの地域への進出は、国家存亡に関わる大きな意味をもつという現実の事情があったのである。

そうした背景を以て、第一次近衛内閣(昭和12<37> - 13<38>)では、「大東亜共栄圏」の先駆となって、中国大陸侵攻を正当化することになる「東亜新秩序建設」という構想をうちだすのである。

第一次大戦を契機として、世界政治に台頭してきたアメリカは、太平洋地域においても1902年に全土を植民地化したフィリピンを拠点として、また、ハワイHawaiに太平洋艦隊司令部をおき、一帯に睨みをきかせるようになってきていたのである。そこには、「日英同盟の解消は、日本の中国への進出を押し込もうとするアメリカが、日本を国際的に孤立化させる方策だったともみることができる」(同台経済懇話会『大東亜戦争の本質』紀伊国屋書店13頁)という記述にみられるアメリカの対日観が根底に存しているのだった。

19世紀から20世紀にかけて、世界各地に植民地をもち、「陽の没する所のない大英帝国」を建設し、インド、ビルマ(ミャンマー)、マレー、香港等に植民地をもち、シンガポールに東洋艦隊司令部をおいていたイギリス、インドシナ半島を領有していたフランス、インドネシア(地方)を植民地としていたオランダ等が、対戦相手だった中国と共に日本を包囲する形をとっていたのである。

A(America), B(Britain), C(China), D(Dutch)包囲網を形成した諸国が、昭和12(37)年から始まっていた「日中戦争」の相手国である中国(中華民国)をアメリカが主導してこれを援助、それと共に、日本への圧力、それは、特に、経済的な面で顕著となり、これが資源の乏しい日本にとっては死活問題となってきたのだった。

これの打破、対抗のための「大東亜共栄圏」構想といえるのであるが、そのために、「南進論」が活発化するのである。

そして、それは、「辛亥革命」Xin-hai-geming(1912 - 15)の際に孫文Sun Wen(同治5

<1866> - 1925)等の革命派によって唱えられた「五族協和」Wu-zu-gong-heの主張,それは,漢族,満州族,モンゴル族,ウイグル族,チベット族の5民族が平等な立場で中華民国建設を目指すというもので,その考え方と結びつき,更に,アジア諸民族の独立の願望を達成するため,互いに協調し,一つの大アジア建設を標榜するという「大東亜共栄圏」構想に貢献したのだった。

これに対して,欧米列強による植民地からの解放を願望するアジアの人々が賛同し,自国の独立を夢みた者達がこれに積極的に参加したのだった。そうした人々の中であって,インドのボースSubhas Chandra Bose (1897 - 1945),ビルマのアウン・サンAung San (1914頃 - 47),インドネシアのスカルノSoekarno (1901 - 70),ハッタMohammad Hatta (1902 - 80)等があり,彼等はその代表といえるのである。

そして,「大東亜(太平洋)戦争」の緒戦における日本軍の善戦が,これらの国々,人々に日本への期待を大きくさせ,また,日本(軍)も,当初,これらの人々に対し,その夢が実現するよう対応したため,現地の人々との関係を友好的なものにしたのだった。

中でも,インドネシアにおいては,「日本軍が極めて短期間に蘭印の大軍を破ったことにインドネシア人は驚き,白人神話は崩れ去った。ここでも,『白馬に跨がる英雄が率いる神兵がきて,インドネシア独立を助けてくれる』という民間伝承があり,日本軍はその神兵に擬せられ,いたる所で大歓迎を受けた⁽⁸⁾と指摘されるという経緯があったのである。

「大東亜共栄圏」構想は,まさに,読んで字の如くで,アジア一帯の国々,人々が日本を中心として連帯を結び,共に栄えていくというもので,これを表面からみた場合,欧米列強の植民地政策の下に呻吟していたアジアの諸民族にとって,日本(軍)は,まさに,救世的存在として写ったとしても不思議ではない。

そうした中から,インド,ビルマ(ミャンマー),フィリピン,インドネシア等は,「大東亜(太平洋)戦争」の終結に伴って独立していったのであるが,それぞれはそれぞれなりの問題を以ての独立であり,インドネシアも体制を建て直したオランダとの間に独立戦争を戦うことになるのである。

そうした中で,独立の指導者となったスカルノやハッタのもつ資質が,日本に対する協力体制の構築から始まり,これへの批判的姿勢とそれに伴った掛けひきを経て,戦後,旧日本兵をも活用してのオランダからの独立を果すのである。

そして,「大東亜共栄圏」構想と共に,昭和15(40)年の第2次近衛内閣における「基本国策要項」策定にあたり,従来の「東亜新秩序」よりも更に広大な「大東亜新秩序」の建設を日本の国是であるとしたのだが,ここで取りいれられたのが,『日本書紀』にみる神武天皇の大和橿原に都を定めた時の故事に則ったという,「皇国の国是は八紘一宇とする肇国の大精神に基づく」という「八紘一宇」の思想だった。



公立小学校 クランピタン（タバナン県）



公立小学校全景 クランピタン（タバナン県）

それは、「世界を一つの家とする」という考え方であり、それを以てアジアの民族が一つの家族のように団結し、西欧、特に、その植民地主義に対抗していくのであるとし、その盟主としての日本の役割は重大で、そのために、それぞれの地域において、日本式教育を行うことが大事だとして、それに専念し、日本語教育に力をいれることを始めとして、日本式教育制度の普及に努めるのだった。

これにあたり、日本からは、鈴木氏等の「よりすぐり」の教育関係者が各地に派遣され、これに従事することになるのだった。

そこで行われた諸施策の中でも、最も重要ともいえるものが授業料を無料にしたということで、これによって、入学者が増えたという記述がなされているのである⁽⁹⁾。このことからすると、日本の教育についての施策が功を奏しということがいえるのであるのだが、その背景には、日本とオランダ、彼我の現地の人々に対する考え方が違っていたというところに起因していたということができるのである。

オランダは、住民に教育をつけるとオランダを批判的にみるようになるということで、授業料にしても現地の人々にとっては高額なものをとっていたという事情があった。これに対し、日本の文教政策は、確かに、オランダが考えていた懸念は日本にもありはするが、とりあえず、授業料を無料として日本式教育を施すことを第一とするというのだった。そこには、それにより、「大東亜共栄圏」建設の担い手とすることと共に、戦争の協力者としての役割を担わせようとするという一面があったからなのである。

こうした日本式教育の導入に関して、鈴木氏は、「オランダは愚民政策、文盲政策とともに、分割統治主義を採っていました。彼らが最も恐れたのは、住民の自覚と、その団結とでありました。原住民の教育をすすめる、文化や民度を向上させることは、彼らの眠れる意識 - 民族的自覚をゆり起こす結果になる。出来るだけ長く彼らをその安眠の中に静止させねばならない。これが愚民政策の因って来る理由であったのでしょう。植民地を本国の利益の対象としてのみ見る限りにおいて、この政策が合理的であり、最も賢明なものだったことも申すまでもないでしょう。

しかし我が八紘一宇の精神は、そうしたことを許すべくもありません。日本は占領地を日本の食物として見るものではない。彼らには何らかの天分なり能力なりがあるならば、それは開発されねばならない。彼らを強いて文盲に閉じ込め、彼らの力の発芽を閉ざしておくことは天理に反している⁽¹⁰⁾と記しているように、「八紘一宇」の精神を以て、植民地の人々を開化することの意義を述べているのである。

そこには、欧米の植民地主義に対抗する「大東亜共栄圏」の考え方が根底にあり、その意義を是としているといえるのであ



公立小学校教室入口
クランピタン(タバナン県)



下校風景 クランピタン（タバナン県）

る。

そして、自分達の行った小スンダ地区の文教政策の成果について、「インドネシア人といえども、気に食わなければ子供を学校に送るわけはありません。この意味において学童がふえたという事実は、学童が、またその父兄が、日本の教育に共鳴している厳たる証左と見て、よるこんでいいことだと思うのであります」⁽¹¹⁾と記し、成功したとするのだった。

前稿において、日本軍による「米」を始めとする「食糧」の調達のために、現地の人々が「食糧」の窮乏を来した旨を記したが、これは本稿においても重要な問題として考えなければならぬのである。

古来、民族同士の争いである戦争の主たる原因としていわれてきたのが、「食糧」を始めとする衣・食・住に関わる生活物資の確保と、種族、民族の繁栄のためにということとで女性を手に入れることにその大きなものがあつた。

近代の戦争においては、後者の問題は稀薄にはなってきたが、前者の、「食糧」の確保については、何時の時代においても、やはり、重要な問題として残っているのである。

戦争遂行の作戦のうえでは、最初からこれを現地調達をするということは少なく、「食糧」を始めとする戦争に必要な物資を調達、供給するための「兵站」を整えることなしに戦争を始めることはないのであつて、これを整えずして戦端を開くことはできず、まさに、この整備こそが戦争の開始および勝敗の帰趨を左右する鍵となるのである。

そういいながらも、作戦計画策定過程で、既に、「食糧」を始めとする物資の調達、供給

を現地に大きく依存する場合もあり、そのためには現地での商取引の慣行や、それに携わる者についての研究は等閑にできないと共にその協力は絶対不可欠なものとなるのである。

そうした点で世界の商取引において名をなした人々(民族)として有名なユダヤ人、インド人、アルメニア人、サラセン(人)等がいる。そうした人々の中で華僑の存在も大きく、東南アジアでは特にそれがいえるのである。

その点で、「支那人のねばり強さと独特の商業組織に驚かされる。主なもの、米、トウモロコシなり。今や日本に協力を宣言せしものの、彼等に対する政策指導を如何にすべきかは南洋500万の華僑とともに重大問題だ。

彼らは低下なる経済力を持つ、そして利益のためにはあらゆるものを犠牲にする。大東亜政策に出発した日本として大事なのは彼等の経済、特に物資の輸出を日本の大東亜経済政策の中に織り込み、彼等をして日本に対して物資を供給せしめると言うことである⁽¹²⁾と榊原氏も記している如く、「大東亜(太平洋)戦争」開始にあたって、日本は、物資の確保、供給について華僑のもっているネットワークの活用を織りこんでいたのである。

だが、そういいながらも、彼ら華僑に対しては一面の懐疑心をもっていたのである。そのために、「蒋政権を離れ、汪政権(汪兆銘を首席とする南京国民政府)を支持し、日本と一心同体の協力をせしめることである⁽¹³⁾とするのであるが、東南アジアにおける商人の代表格たる華僑、それも国際的に認められている彼らに、日本(軍)の梃子いれで成立した汪兆銘政権が、これとどこまで一体化できるのかという点でいささかの疑問が生じるのであるが、当時の日本(軍)は、それが可能だと信じていたといえる。そこには、これを可能にしなければ、戦争を遂行しえないという一面の現実があり、そのためには何がなんでも彼らの協力をとりつけなければならないという悲愴ともいえる側面があったのである。

その点で、榊原氏もそうしたことを現実にもって華僑の協力の必要性を記しているのである。

だが、商人は、基本的には「利」に対して動くのである。そして、上述した人々(民族)は国という意識とそれに対する忠誠心をどこまでも持っているかということが問題になると共に、占領国(軍)にどれだけ義理だてするだろうかということがある。

その点で、日本(軍)は、それをどこまで理解し織りこんでいたのだろうか。そして、戦局が不利になることによってその協力関係がうまくいかなくなれば、事を運ぶのに必然的に「力」が加わってくることになるのである。それはそれで更に新たなる問題を生むことにもなるのである。

その点で、戦争(闘)の過程では、周到に練られた物資の調達、補給方法でも計画に齟齬を来すことがあり、戦局が不利になればなる程それは増大することになるのであって、そのために「食糧」を始めとする物資の調達、補給に苦慮することになり、時に、現地の人々に

強制を強いることにもなるのである。

その点では、「大東亜（太平洋）戦争」は最初から物資の調達を海外に依存することが多かったのもあって、そのために、同戦争におけるアメリカ軍の反攻の転機となった「ガダルカナル島の戦い」、これが行われた同島について、「ガ島」と略していわれていたのだが、戦局の不利に伴って「餓島」と呼ばれるように飢餓に苦しむことになるのだった。南西太平洋、ソロモン Solomon 諸島の一つの同島は、アメリカとオーストラリアの補給線を遮断する役割を担って日本軍が進（侵）出していたのだったが、物不足に加え兵站の長さのための物資の補給の困難さが加わり、更に戦闘に際して、兵力を小出しにしたということによる作戦の失敗によりこれに敗れ、日本軍は同島を撤退することになったのだが、「ガ島の放棄が決まったのは、昭和17年12月31日。撤退は翌年2月1日からだが、兵員約3万2,000人のうち生存者は1万665人、死没者が2万1,138人。うち飢餓やマラリアなどによる衰弱死が過半数を占めた」⁽¹⁴⁾といわれるように、「ガダルカナルの戦い」の失敗も、補給の確保という「兵站」の不備によるものともいえるのである。

こうした補給の不備は、ひとつ「ガダルカナルの戦い」だけでなく、「大東亜（太平洋）戦争」も中盤になると至る所にそれが露呈、緒戦の善戦のために開戦当初の計画を越えた作戦が展開され、戦線が拡大してしまったこともあり、各地で兵站が行きづまり、以後は、坂道を転げ落ちるかのようにならざるを得ない戦へと向って行くのだった。そして、決定的なことは彼我、特に、アメリカとの国力の差があったということになるのである。

また、そこには、「輜重輸卒が兵隊ならば、蝶々、蜻蛉も鳥のうち（あるいは、電信柱に花が咲く）」という、歩兵や砲兵という実戦部隊こそ兵（軍）隊の花であり、補給や輸送部隊を低くみるという伝統的な我が国軍隊のもつ差別意識があり、これが兵士の士気を鼓舞する一面もあったのだが、一方では、補給や輸送に携わる兵士を馬鹿にしていたため、これが、軍隊の連携プレーを阻害する要因となったのである。連携プレーなくして勝利をえることが覚束ない戦争（闘）を反対の方向へもって行ってしまったのが日本の軍隊の在り方だったといえるのである。

そのうえ、日本軍のもつ伝統的な精神論、それは、天皇のために死ぬことの誉れと、それに伴う人命の軽視が根底にあったといえる。人間を消耗品扱いにするという。

「戦争において後方支援、物資輸送が勝敗を決定した例も多いのに、日本陸軍では創設から滅亡まで、常に補給を軽視していた」⁽¹⁵⁾と指摘されるのだが、一事が万事、こうした考えで事が進められたのもあって、戦争ほど、「食糧」、兵器を始め物資の確保・補給が必要であり、また、その消費が大量に行われるものはない。

それに関わらず、局面の打開のために、「精神力」がいわれるのである。合理的に事を進めなければならない戦争（闘）において、「精神力」は一時的には通用しはするが長期に

わたるものには、あてはまらない。そういう点では、日本人にとっては、限定された所での短期決戦が向いているのかもしれない。

「大東亜(太平洋)戦争」に際して、アジア各地に存在する物資、産物を日本、特に、その産業に資するためという目的意識が強くあり、そのための物資の確保のために、今日いわれている「エコノミック・アニマル」的一面をみせて商取引が行われて戦争が遂行されていたのだが、戦争の進行と戦局の悪化に伴い、それまでは、まがりなりにも秩序立って行われていた調達、補給の方法、手段が寸断されることになってしまい、各地に孤立するようになった軍隊は、「食糧」から始まり生活物資の多く、または、全てを現地にその調達のための依存度を高めることになり、「ガ(餓)島」のような餓死者を生むまでになるのである。

「資材や原料の中には、大東亜の各地に仰がねばならぬものも少なくない。例えば、石油、ニッケル、銅、鉄等の鉱物資源および各種の食糧物資等がすなわちそれである。このうち我が小スンダ、ことにバリ島が担当するものは、食糧物資がその重要なものである」⁽¹⁶⁾と、鈴木氏は日本(軍)の物資調達の点でのバリ(島)の役割を記しているのである。

そこに後述するオカ・シラグナダ家であったような問題が起こってくるのである。

鈴木氏のバリ(島)への転勤をもたらした戦局の転換は、昭和18(43)年2月、彼の所属するモルッカ諸島周辺部は民政府から離れ、民政によるよりは作戦に重点をおいた軍政に切り換えられることになったのである。

何時の時代にあっても、他(異)民族との関わりは、そこに関わる一人一人の人間の関わり方如何んによってその印象を大きく左右するのである。それは、平和時であれ、占領下であっても同じで、占領下であっても統治者にゆとりのある場合には問題は少なくすむが、それが失われてくると統治者、被統治者の関係も微妙なものになり、当初は、容易にできた「食糧」を始めとする物資の調達、補給も被統治者(住民)の中には非協力的態度をとる者もでてくることにもなり、その増加によって、両者の関係に変化が生じ、それはやがて、「食糧」を始めとした物資の調達、そのための統治者による強制が伴ってくることにもなるのである。

それが、住民による統治者に対する気持(感情)の良し悪しを決めることになるのである。

この点で、既に、本紀要34号で記した如く、オカ・シラグナダ氏の言に従えば、同家へ日本兵がやってきて、門前で示威行為を行ったため、収穫した「米」の搬入に支障が生じたというのだった。

それに伴って、日本兵にみつからないようにと、姉をその目につかない所に隠したという話もされたことがあったが、これは、同氏の一族が、日本軍(兵)に対し、一面の疑いと警戒心、更には、敵対心につながる気持(感情)をもっていたということもできるのである。

同家の一族にこうした気持(感情)をもたせるようにしたのは、どの辺りにその原因が存

するのかということが問題なのである。

そうした個々の問題の背後にある本質的な問題を含む事柄として、「日本軍のインドネシア占領は西欧農園企業を衰退させた。さらに残存した農園企業の生産物も日本だけでは消化しきれず、輸出用作物の生産が制限された。これらは輸出用作物栽培や農園労働者の生産手段を奪う結果となり、かれらに大きな経済的打撃を与えた。

また、戦時体制はインドネシア域内貿易をも後退させ、ジャワからの輸入に頼っていた外島の各地方では深刻な米不足に悩んだ。この米不足は農民に対する米の強制供出へとむすびつき、しかもそれが強権をもってなされたことは、かれらに大きな不満をいだかせた。』⁽¹⁷⁾ というように、体制の変化、この場合は、日本（軍）による占領統治なのだが、この変化に伴って、永年にわたって培ってきた体制に基づいた秩序に対する根本的な考え方の変更が、これを根底から覆すことになり、これまで順調にきたもの、それは経済的なものであれば利益、産業であれば生産量の変化を来し、多くの場合、商取引のシステムを破壊したり生産量の低下をもたらすことになるのであって、インドネシア（地方）でも日本（軍）の進（侵）出が、それまで安定していたものを秩序（システム）を変えたことによって米不足をもたらすようになってしまったのだった。

それは、一挙に多くの日本人（兵）がきたこともあるが、それに伴って行われた農業政策の変更がこれをもたらしたのである。

この点に関して、現代社会においても、例えば、アフリカのジンバブエでは、黒人主体の国づくりということで、永年にわたって白人が築きあげてきたプランテーションを接收して、黒人に払いあげたのだが、彼らには、それを経営していく知識も技術もなく、いたずらに農園を疲弊させるに止まっているということと、それに伴って、経済活動の低下がもたらされたとのことが指摘されているのである。

そして、それは、生産高の低下に伴う経済への打撃、それに従って、そこで働いていた農民達の生活にも混乱をもたらし、その農園に生まれ育った者達を離職させると共に住みなれた土地を出ざるをなくさせ、彼らを流民とすることになり、それによる社会不安をもたらしているという問題が現在起こっているという。

日本（軍）のインドネシア（地方）への施策、その変更の中で農業を中心としてみただけでも、どれだけの強制があったかということで、従来のようにはいかなくなったことにはなり、上記のような記述がなされるのである。

「日本軍のインドネシア占領の目的は、石油などの豊富な資源確保にあった。これらの資源開発や防衛工事の労働者として大量のジャワ人が“経済戦士”の美名のもとに動員された。日本軍の用語でいう“労務者”としてビルマから西イリアンにまで広く送りだされたジャワ人の数は二 万とも三 万ともいわれ、(中略)原則的契約によってはいたが、実際には強

制，虚偽契約，配給保留による圧迫，さらには農民の手当りしだいの拉致^{らぢ}などの手段もとられた。一般の労務対策として一六歳以上四 歳未満の男子，一六歳以上二五歳未満の独身女子を全面的に登録させ，各州単位につねに五 名以上の労務動員が可能な態勢を整えていた⁽¹⁸⁾と指摘されるように，日本（軍）への協力にも可成りの強制が伴っていたことがあったということが分かる。

陸軍と海軍との違いがあったとはいえ，バリ（島）では，オカ・シラグナダ氏にいわせれば，「労務者」はいなかったということではあるが，「戦争の進展は，どこでも同じで食糧の増産および供出に拍車をかける結果を招いたのであります。最近における当民政部の施策の多くはこれを重点として輻輳^{ふくそう}していたと申しても過言ではないほどこれは重要な問題でありましたが，これに関連して供出運搬がまたなかなかの難問題でありました。その結果が公学校学童の浄汗奉仕となって現われた次第であります。（中略）供出運搬奉仕はもちろん学童だけではなく，一般農民，官公吏，婦人会，華僑等あらゆる階層にまで及び，最も大規模に行われたバドン（州都デンパサール周辺の県＜王国＞ 筆者注）のごときは，一回に数千余人が動員され，そのうち学童が三千余人を数えたというようなものもありました⁽¹⁹⁾という事実，これを裏づけるものとしての，「今日までの教育においては，読書や算数の出来る物識りは出来たが，生きた世間に伍して，物の役に立つ生きた人間は育成されなかった。

新時代の教育はこうした古い教育の欠陥とするところを芟除〔取り除く〕せんとするもので，消費の代わりに物を作り出すことを主とするところにその基礎がある。米を，棉を，野菜を，紙を，縄を，白墨を，その他の生活に必要な品々を生産し，進んでは国家の防衛や進歩につながる飛行機その他の機械器具等までも手をそめるところまで徹底していく教育である。つまり国家並びに世界の進歩に貢献する基礎を直接に培う教育にほかならない⁽²⁰⁾という記述にみられるように，戦争の逼迫に伴ったこうした教育方針の転換によってバリ（島）でも生徒，学童に対する勤労奉仕，労働を行わせることになったのである。

終（敗）戦時小学校3年生だった筆者も，「大東亜（太平洋）戦争」開戦の詔勅が出された昭和16（42）年12月8日を記念して，毎月8日が「大詔奉戴日」となったのだが，この8の日に，神社等町内の要所を掃除したことを記憶しておるが，これも国内の教育の一環として行われたものだった。更に，中学校，女学校の生徒達は，「学徒動員」と称して工場等で労働に従事し，中には，軍需工場で働いていて空襲で死んだ者も沢山いた。

これは，昭和16（41）年に「学校報告隊」が組織されて，勤労動員が行われ，昭和18（43）年，「学徒戦時動員体制確立要項」が閣議で決定され，昭和19（44）年8月には「学徒勤労令」が公布されて国民学校初等科以外の授業が停止され，全学徒は決戦体制に組み込まれることになっていったのだが，これが同年5月には「戦時教育令」で法制化され，学校教育は事実上停止され，中等学校生徒を含む全ての国民は決戦体制へと臨まされていくのである。

こうした国家の事情による措置の背景があったのであって、それは、鈴木氏がしているような生易しいものではなかった。もっとも、そこには多少の時間のずれがあるのである。

こうした動きに伴って、日本（軍）占領下の海外諸地域、インドネシア（地方）、バリ（島）においてもそれに添った教育政策がとられるのだった。

日本（軍）の敗色が濃厚になるに従いバリ（島）を含むインドネシア（地方）に対する政策も厳しいものとなってくるのであって、学校教育にもそれに伴った施策が導入され、児童、生徒にも教育の一環と称して勤労奉仕が課されるのだった。



マドキン学園 講演風景 デンバサール（バドゥン県）



マドキン学園 理事長・園長室 デンバサール（バドゥン県）

その点に関して鈴木氏も記している如く、バリ(島)では階級があり、それはバラモン Brāhmana、(ク)サトリア(K) satria、バイシャ Vaiśya、シュードラ Sudra とに分かれており、前三者をトリワンサ Torywansa といい、シュードラが労働者階級となっていた。

こうした身分社会にあって、児童、生徒の教育の一環という形をとっての勤労奉仕、労働についてトリワンサの者達にはどう考えられていたのだろうか。今後の課題といえる。

敗色がみえてきたとはいえ、鈴木氏の在勤中は未だ決定的といえないので、鈴木氏を含む日本人(軍)の現地の人々への対応についての記述にしても頹勢を否定しえないが、未だ、救いを感じさせられるところのものがある。

そうした鈴木氏達のバリ(島)での勤務の在り方について同書に従えば、同氏の同僚、部下にあたる教員のその仕事にあたる意気ごみについては感心させられるところがあるという。

曰く、『ほんとうにバリ人を知らずして、バリ人の教育は出来るものじゃない。バリ人を知るにはその家庭の中に入って行くところまで徹底しなくちゃ駄目だ』

彼はこういって、原住民の家庭の中に飛び込んでいったのです。もちろん邦人としてもはじめてのことですが、オランダ時代にもこんな例はなかったことで、原住民はおどろきながらも、心からよるこんで迎えたことは申すまでもありません⁽²¹⁾と、鈴木氏も部下である浅利教諭の行動、対応に敬意を表しているのである。

こうした日本(軍)の「大東亜共栄圏」を掲げてのインドネシア(地方)での行動について、一方の当事者であるオランダ(人)の立場からは、「日本軍のオランダ侵攻は侵略戦争としてだけでなく、ある種の“違反”とも見なされた。つまり、西洋の国を攻撃するとは身分不相応なことであり、そのうえ負けることを知らないとはなんと礼儀知らずで謙譲の美德のなさよ、と見なされたのである⁽²²⁾と指摘される見方が行われるという西欧、白色人種優越の考え方があったのである。これは一時代前の「黄禍論」Yellow Peril にもつながるともいえる。

一方では、「私自身も、日本軍抑留所での苛酷な経験にもかかわらず、日本に対する憎しみの感情はもっていない。それに、私の年齢(日本軍がオランダ領東インドを征服したとき十二歳だった)の少年の例にもれず、私はひそかに、そして心ならずも、大いなる自負と虚栄を誇った植民地宗主国政府を数日間で粉砕した国に、称賛の念すら抱いた。確かに個々の日本人との接触には失望させられたが、あのように優秀な飛行機や軍事工学技術を生み出した力が日本国のどこかにあるのだと、そしてオランダの戦争政治宣伝はその点に関して自国民に嘘を告げていたのだと、私はしかるべく認識したのだ⁽²³⁾という、自らも収容所生活の経験者である(同書の)著者は戦後20年を経て書き始めた同書において、彼が接したオランダ人の大方の日本についての感情とは別に、日本のもっている底力を認める一面を示すのである。

もっとも、個々に接した日本人については良い印象を受けてはいないのだ。この点、上述した、異民族との関わり、この場合、統治者と被統治者との関係になるのだが、個人の関わり方で与える印象が決まってくるのであって、著者はこの点では好印象はうけていなかったことにはなる。

そして、「当時の日本には、その文化力・経済力・科学力・軍事力からしても、アングロサクソン体制に反抗してこれに代わるだけの力量はなかった。多くの不満があるとしても体制を認め、世界第三位の地位に止まるべきであった」⁽²⁴⁾と、そこにも、また、「大東亜戦争」に至る経緯について、「アングロサクソンに反旗を翻す」⁽²⁵⁾という白色人種優越の見方がなされるのである。

結

以上、教育関係者の一人としてインドネシア（地方）に赴任していった鈴木氏の行動を中心に、日本（軍）統治下のバリ（島）での文教政策を主とした占領政策を考察した。

そこには、赴任当初の、国内で考えていたオランダ領東インド（蘭印）といわれていたインドネシア（地方）についての認識の違いに関して驚かされると共に、感心させられているのである。

それは、特に、上下水道とか道路といった、今日、日本でも可成り使われるようになってきた言葉であるインフラストラクチャー Infrastructureの一面のものであって、その点でのオランダの植民政策の優秀さを認めているのである。

その一方では、鈴木氏の専門である教育に関しては、オランダの愚民政策の結果、その遅れを指摘しているのである。

そして、そこに自分達の教育に関わる意義を感じているのである。

授業料を無料にすることで、児童・生徒の数が増えたということを始めとして、その施策について成功した側面を感じさせられた部分もあったが、戦局の変化によってそれは戦時体制に即応したものになっていくのである。

そして、それは、彼らの生活習慣とどこまで対応したものだったのかという点で問題があったといえるのだが、そこには、「大東亜共栄圏」という物の考え方に基づいた、日本中心、日本がこれらの地域の人々を日本の考えている方向へ開化させてあげるのだという思い上がりを感じさせられる側面が前面に出た行動となっていたため、充分とはいかないのみならず、時に、無視、または、これを改善していかなければならないという押しつけもあった。それは、占領政策ということで致し方ないといわざるをえないのかもしれない。

従って、そこに現実に活動することになった鈴木氏や浅利氏達は、自分のおかれている立場で精一杯やり、それはそれで現地の人々に受けいれられ理解されたといえる。時に強制

もありはしたが。

「大東亜(太平洋)戦争」における日本(人)については様々な面でふれられているが、インドネシア(共和国)に関しては、「食糧」の徴発、「労務者」、はたまた、「従軍慰安婦」の問題等多々あるにも関わらず、その独立に際して、旧日本軍の兵士がこれに参加して活躍したこともあり、また、独立の立役者だったスカルノ等が親日的だったこともあってか、中国、韓国の人達よりは対日感情が穏やかに見うけられるというのは思いすごしか。

注

- (1) 鈴木政平『日本占領下 バリ島からの報告 東南アジアでの教育政策』草思社 1999 289頁
(同書発行に尽力した慶応大学教授 倉沢愛子氏の解説)
- (2) 同上書 289頁(同解説)
- (3) 和田久徳 森弘之 鈴木恒之『東南アジア現代史』山川出版社 昭和52 210頁
- (4) 鈴木 前掲書 11~12頁。反面、「たとえ学校を出ても、町に出てよい職にありつける機会がさほどあるわけでもなかったので、教育を受ける者の数は多くなく、オランダ時代末期(1940年)のジャワにおける学校数および生徒数は、村落学校9,600校,120万人,高等小学校約1,600校 20万人,各種の私立小学校約700校,8万人,であった」(倉沢愛子『日本占領下のジャワ農村の変容』草思社 1996 55頁)というジャワ(島)における学校についての記述もある。
- (5) 榊原政春『中尉の東南アジア軍政日記』草思社 1998 173~4頁。また、鈴木氏もバリ島の道路の良さについてふれている。(前掲書41頁)
- (6) 鈴木 前掲書 14頁。昭和16年9月、改造社刊、『蘭印の印象』の中で、作家、高見順は「蘭印点描」とした一文で、バリの人々のことを「土民」という言葉で表現している。また、「行く前に『今度蘭印へ行きます』と人に話したところ、その人からあとで手紙が来て『仏印へ赴かれる由...』とあった。聞き違いかもしれない。しかし仏印も蘭印も何かゴツチャにしているところも、慥かにあるのだ、そして、「同じようにジャバで働いている人で、最初船に乗った時布哇へ行くつもりだったところ、ついってみると爪哇だった」(川端康成、佐藤春雄、志賀直哉編『世界紀行文学全集』第14巻『南アジア編』修道社 昭和35年 104頁)と記しているが、当時の日本人のこの地域についての認識の様子が知れる思いがする。
- (7) 西岡香織『アジアの独立と「大東亜戦争」』芙蓉書房新社 1996 103頁
- (8) 同上書 207頁。「一般民衆のあいだでも、オランダの対独降伏やインドネシア議会開設拒否によって、反オランダ感情と民族意識が募った。しかし、彼らのこうした感情は、反ファシズム運動と結びつかず、反対に日本のインドネシア進出を期待する風潮さえ生み出した。彼らは、白人種をインドネシアから追放してくれる伝説的“救世主”の化身に、日本を祭りあげようとしていたのである」(谷川栄彦『東南アジア民族解放運動史』勁草書房 1969 293頁)というように、自らの民族解放運動と「神兵(救世主)」の役割を日本軍に期待したのである。
- (9) 鈴木 前掲書 95頁
- (10) 同上書 75頁
- (11) 同上書 202頁
- (12) 榊原 前掲書 34-35頁
- (13) 同上書 13頁
- (14) 『週刊 日録 20世紀』講談社 平成11年3月16日 8頁
- (15) 同上書 10頁
- (16) 鈴木 前掲書 180頁
- (17) 和田他 同上書 213~4頁
- (18) 同上書 215頁。「黄色い肌の植民地主義者は、やがて^{ロームシャ}労務者の制度を設け、インドネシア社会に大きな悲劇をもたらした。何千、何万というジャワの人民が強制労働にかりたてられた」

- (“ Autobiography dari Prof. Kusma Sumantri ” 1971, Stencil) 後藤乾一訳 『インドネシア民族運動の源流 - イワ・クスマ・スワントリ自伝 - 』早稲田大学出版部 昭和50 108頁
- (19) 鈴木 前掲書 186頁
- (20) 同上書 182頁
- (21) 同上書 216～7頁
- (22) Kousbroek, R., “ Het Oostindisch Kamp Syndroom ” Amsterdam 1998 近藤紀子訳 『西欧の植民地喪失と日本』草思社 1999 10頁。女性として戦争中の収容所生活の体験を記した Colijn. H., “ DE KRACHT VAN FEN LIED ” Uitgeverij Van Wijnen 西村由美訳 『歌の力』木犀社 2001がある。
- (23) 同上書 10頁
- (24) 同上書 15頁
- (25) 同上書 20頁

Research Note

The Social Climate and Linage in Bali

Masamichi MATSUBARA

Last time I tried to research two problems about Indonesia(area)includ Bali(island).

One of them was about the food especially“ Rice ” which provided for Japanese (Soldiers) under Japanese occupied, consquently brought the lack to native people.

Another one was about“ Rohmusha ”who made work for Japanese(Soldiers)by force.

This time I try to research about the education in Bali (island)under occupied Japanese(Soldiers) depend on the book of『日本占領下バリ島からの報告』.